

ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと風

第185号（2021年10月）



白井啓治

(一三) 食事こそ最大の教育

(2008年10月9日)

『あばら家は今夜も賑やか 蟋蟀の声が金木犀を連れていった』

風流とは全く縁のない下世話な年寄りではあるが、たまには意識して時の移ろいを眺めてみると、そこにはいろいろなるものが行き来していることに気付かされ楽しくなる。蟋蟀が金木犀を連れてやってくるなどは、移ろう時を意識して眺めようとしないと、私のような凡人にはなかなか気付けないものである。

先日、テレビを見ていたら景気低迷の話の中で、食費を切りつめても教育費は減らせない、というアンケート結果の話をしていた。その時は何気なく聞いていたのであったが、後で考えてみると、教育費の多くの内訳は受験のための学習塾費用のことであった。

私は、受験のための塾に通わせるのを教育とは思わないので、その塾にかかる費用を教育費だとは思っていない。毎月子供たちにどのくらい本を買

ってあげているのだろうか。一緒に映画を観に行ったりすることがあるのだろうか。ちよっと洒落をして演劇を観に行ったことがあるのだろうか、コンサートに行ったことがあるのだろうか、とってしまった。

私は、何を切りつめても食費は切り詰めてはいけなさと考えている。そして、食事こそ最大の教育であると思っている。極端な言い方をすれば、旬の食材の味が分からないような奴は、ろくな思想が持てないと思っている。だから食費は切り詰めても教育費は切り詰めることはできない、というアンケートに言う主婦感覚というのは理解できない。



(絵：兼平智恵子)

私も二人の子供を育てたが、学習塾というところには通わせたことがなかった。ただ困ったのは、塾に行かせないと友達がなくなるとい

あった。テレビゲームはパソコンに役立つなどとバカげた話を聞いたが、私は買ひ与えなかった。父はテレビゲームが嫌いだから、と言っていた息子は、今では最先端のコンピューターソフトの開発者になっている。

アンケート調査にいう教育費の大半を占めるのは塾の費用である。でも、「これって教育費か？親の見栄の趣味費だろう」と思うのであるが、極端すぎる言い方だろうか。

(本稿は故白井啓治氏の常陽新聞に2008年7月より約1年間に亘って掲載されたエッセイを載せています。)

ふるさと風の会会員募集中!

当会では、「ふるさと（霞ヶ浦を中心とした周辺地域）の歴史・文化の再発見と創造を考える」仲間達を募集しております。自分達の住む国の暮らしと文化について真面目に考え、声高くふるさとを語り、考える方々の入会をお待ちしております。会の集まりは、月初めに会報作りを兼ねた懇親会と月末に雑談：勉強会を行っております。

会費は月額 2,000 円。(会報印刷等の諸経費)

※入会に関するお問い合わせは下記会員まで。

打田 昇三 0299-22-4400 兼平智恵子 0299-26-7178

伊東 弓子 0299-26-1659 木村 進 080-3381-0297

編集事務局 〒315-0014 石岡市国府 4-3-32 (木村)

HP <http://www.furusato-kaze.com/>

地域に眠る埋もれた歴史(73) 木村 進

【6 真家・瓦会・有明地区】(4)

6.5 日笠神社(瓦会)

この瓦会地区は、地図では瓦谷(かわらや)と瓦会(かわらえ)の表記が混在している。元々は明治22年に近隣の小埜村・宇治会村・瓦谷村・野田村・佐久村・部原村の6つの村が合併して、瓦谷と宇治会の2つの村の名前から瓦会となったという。

この瓦の由来は、ここで国分寺などの瓦を焼いた窯跡がいくつも発見されたことが由来していると思われる。

8世紀頃にこの山側の台地で瓦を焼いた窯がいくつも掘り出され、ここで焼かれた瓦が府中(石岡)の国分寺などに運ばれたものと考えられている。瓦会の郵便局のある交差点に古びた神社がある。



入り口には「村社日笠神社」という大きな石柱がたてられている。

またもう一つ鳥居の前に石の「道標」が置かれている。「石岡 柿岡 真壁」と書かれている。

「石岡」という名前が使われているので明治以降にたてられたものだと思う。

また交通安全なども彫られているので比較的新しいものだろう。

この道標の左側には「恋瀬 福原 笠間」と彫られている。右側は読みにくいが「真家 岩間 水戸」とも書かれているのだろうか。

ここは石岡(府中)からの瓦会街道であり宇都宮まで行く「宇都宮街道」が通り、水戸から筑波山へ行く「瀬戸井街道」との分岐点だと思われる。瀬戸井街道は、ここから柿岡へ向かっており、そこからつくば山への道を通ったものと思われる。このような道標も何か知るきっかけとなりそうです。

境内に神社の沿革を書いた石碑が建てられており、内容を要約すると、

「日笠神社の祭神は弟橘姫命で創建は建治元年(1275)と云われ、近郷近在の人々に広く崇敬されてきたが、南北朝時代の難台山の戦乱で1388年に兵火で焼けてしまった。

その後、再建されたようだが、記録ははっきりせず、江戸時代に牛久三藩主より1683年から毎年祭祀料の寄進があった。

1832年に再建した記録があるが、その後1841

年に近隣の大火で類焼し、1850年に再建された。境内神社として金刀比羅神社(大物主命)、稻荷神社(倉稻魂命)、浅間神社(木花開耶姫命)を祭る。」

ここで気になるのは、まず祭神が「弟橘姫命」であること。なぜこのような地に東京湾で入水したヤマトタケルの妻がまつられているのか? またもう一つ、この地が江戸時代牛久藩(山口家)の領地であったということ。イメージとして浮かんでこないが、牛久藩は新治郡にも多くの領地が有り、となりの下総国(今の千葉県)にも領地があったようだ。



日笠神社という名前の神社は全国的にもあまり多くはないようだ。

拝殿の裏に本殿があり、本殿には一部火災の跡も見られるが、立派な昇り龍の彫り物が施され

ている。



日笠神社の境内にもう一つ気になる石碑が建てられていました。

「茨城黄色種」と書かれていても、地元の方以外はタバコの葉のことだと気がつく人も少ないかもしれません。

この瓦会地区をはじめ、八郷地区には葉たばこ農家がたくさんあります。

石岡は大きなタバコ組合があります。

今は肩身の狭い思いをしているのかもしれませんが、全国的に見てもこの地区はタバコで成り立ってきたのかもしれない。

黄色種をとるのは、葉たばこの代表的な種類でタバコの味や香りの主体となるものだそうです。一般的には「つくば黄色種」と呼ばれるようですが、この黄色種が初めて栽培されたのがこの地区なのかもしれません。

主に茨城から南で栽培されています。

このあたりを通ると、黄色く色づいた葉たばこがたくさん栽培されているのを見かけます。

しかし、時代の流れで徐々にこれも減っているようです。今では健康趣向の「ブルーベリー」や「ぶどう」の里に生まれ変わる日もそんなに遠くないかもしれません。

海外旅行の思い出(5) 木下明男

27年ほど前のこと、前年に続いてモンゴルウランバートルへ・・・

1994年8月9日名古屋空港を、全国から集まった35名の労音代表団が、チャーター機で名古屋空港を出発。この機は列島に沿って南下し、九州を過ぎてから大陸に向けるコース。丁度南方の台湾付近に大型台風が発生、その台風を避けて飛んでいる所をか揺れが激しい。そのため FASTEN SEAT BELT のサインランプが付きっぱなし。此の頃喫煙者の私には、*SMOKING* は大変辛い？だが、チャーター機の前列の私とチャーター機責任者は、扉を明けてある操縦席の後ろで(客席からは見えない)隠れて喫煙・・・？他の乗機者に後ろめたい気持ち・・・？やがて晴れてきたが、多少の揺れは続いており、まだ海上である。ノースモーキングランプも消え、機は大陸へ・・・1万メートル上空、時速850kmで航行のアナウンスが給油地の天津迄40分。1時間の給油タイム後3時間でウランバートル空港に着陸の予定。あと30分でウランバートル着とのアナウンスが流れ、眼下を眺めると地表はまだ明るい、大小の湖沼が点在している。更に降下するにつれて、

大小の河川が蛇行している姿が手に取るように見えた。やがて、白い点々としたものが大地に点在している、多分ゲルなのだろう？

夜9時半、ウランバートル空港に着陸。入国手続き後税関を通過、荷物にホテルの部屋番号を書き込んでマイクロバスに乗車。出迎えに、Tさんが・・・1年ぶりだ！懐かしい、ホテルは郊外にある迎賓館敷地内にある。(隣には大統領官邸)翌日のスケジュールは午前中市内見物、国会前広場・ロシア記念碑等、銀行でトゥクルグ(1ドル≒400トゥグルグ、この年は1ドル≒1000円)を購入、バヤンゴルホテルで食事後百貨店と博物館へ・・・市内散策中嵐(雷と強風)に遭遇、そんな中日本人(ジヤイカ)と出会う。まだ市内なので、モンゴルの大草原は体感していない。

モンゴル二日目は、ウランバートルから520キロ南へプロペラ機で90分、南ゴビ砂漠へ・・・。大草原と砂漠(砂の大地ではない)夜は満点の星空に星、やっとモンゴルを感じられる。胸を弾ませて空港へ・・・予定より乗客が多いので1機増便するらしい？後発(10分遅れ?)の方がゆっくり乗れるというので待つことに・・・。ところがいくら待っても出発しない、其の筈先便からの折り返し(南ゴビから)待ち・・・。3時間遅れで、やっと乗機・・・。やれやれと思ったら、今度は座席がない(T君と二人分)。余りの杜撰さに、乗務員を捕まえ怒鳴りつける・・・？乗務員は我々を宥めながら、案内した席は操縦席、然も私は機長と副機長の間に??? 啞然とするともに、目の前で飛行機の操縦(離陸と着陸)を見られ、ラッキ

ーさに大御機嫌になった。やがて南ゴビに到着、操縦席からは滑走路が丸見え、ナント・・・無舗装の大地に白線が引いてあるだけ、大丈夫かハラハラの着陸。辺りは、何もなく荒地が広がるだけ、数十分バス異動して砂丘を見に・・・此の日の宿はゲル、当然のようにシャワーも風呂もない、希望者には、蛇口から水を浴びるだけ？

その翌日は、一般ゲルを訪問・・・チーズの菓子や馬乳酒を頂く、決して美味しいものではない。モンゴルの馬（日本で見る馬より少々小ぶり）に乗せて貰う。再びウランバートルに戻る、民族アンサンブルとの交流やキャンプ場でバーベキューを楽しむ。自由時間の時に、市場前で呼び止められドルはないかと問われる。どのくらいの変換率か聞いてみると、ナント公式レートの数倍で・・・？今回のツアーは、全国の労音でモンゴル民族アンサンブルの招聘に向けて交流するため・・・。そのアンサンブルから、馬頭琴（音域チェロ）などの楽器（実際の演奏用で本物）をプレゼントされる。今まであまり経験のない外国ツアーだった。



あの夏

伊東弓子

古文書で一緒のI先生が、「御留川の活動をしているんですね。」と、堤防のない頃の「霞ヶ浦の湖水浴場」という写真集を下さった。古くは大正十一年の頃から昭和四十年代のもの、一番多かったのは昭和三十年代のもので霞ヶ浦、北浦の十七ヶ所十八ヶ所の場所が紹介されていた。そこには各地域での水泳浴場の姿が写されている。写真の中には植物や湖水線も写されている。地元の人ばかりではなく観光化されていく様子もわかる。玉里でも二十年代、恵比寿神社前、天王宮、大井戸の水遊び場もそれぞれ賑わっていたことを覚えている。きれいな水に魚は数多い仲間とおよぎ、人間もかわわり霞ヶ浦が生きていた時代・悲惨なことも多くあって、子供が溺れ、漁民が死んだ、田が水浸しになって米が全滅した。堤防はそういう中で軍配は農民に上った。そして湖の姿、御留川の姿は一変していった。写真をみながら若い頃の先生のお話の世界に入って行った。

谷津田と里山、台の畑で生活してきたI先生は、上の学校へ行くために、小川駅まで自転車で行き、ガソリンカーで北にむかった。その数年後、今度は小川駅から南にむかって、漁村の学校の教員になった青年の頃、町場から来た先生だと物珍しげに迎えてくれた。子供等は陽に焦げ腫がくりくり動いていて、見るからに腕白そうだった。村の人等も集まってきた、興味半分話しかけてきた。落ち込むような事もなかったと続けられた。

夏休みに入る前、大仕事が待っていた。親達と職員で泳ぎ場づくりが始まった。舟に長めの丸太

を積んで目印を打った辺りに杭を打ち込むのだ。何本も打ち込み、霞ヶ浦の三辺を囲うのだった。若い者は力があつからとやらされたが、力がうまく入らない、上手く杭を打ち込めない。

「危ねえ、頭やられたら大変だ。手ぶったぎれちゃう」と、怒鳴られた。打ち込んだように見えても倒れてしまう。「これから毎年やる度に鍛えられんだ」と励ましてはくれたが、夜になると腕、足、首、腰みんな痛んで体の置きどころがなかった。それでも朝には何とか起き上がった。あの囲いの中で三週間、水遊びをするのか、と思うと気が重い。今日は上手くいくかと思うと、一人一人の子供の顔が浮かんでくる。重い体を引きずるように学校へ向かったという。降りる駅近くなると子どもらの姿が見えてきた。

「先生、腕痛かっぺ。カバンもってやっ」と「手つないでいくべ。引っぱんじゃねえ」と、気を使ってくれた。

そして、どの学年も一日二〜三回は水に入って蛭をとったり、泳いだり烏貝を捕ったり、水澄しと泳いだりする。透き通っていて魚が泳いでいるのがよく見えた。帰りの土産は蛭（しじみ）。みんな分けたら、先生にも土産、今夜は宿直だから、夕食の汁にするという大騒ぎ・・・女の子は黒いズロース、男の子は小さな褌、先生らも褌、金持ちの息子で長めのパンツを履いていた子もいた。校庭に干しとけば次の日も使えた。こうして盆前には水泳も終わったが、毎晩毎晩の蛭汁にも嫌気がさしてきたという。その後舟に乗り込み杭の片付け、よく乾かして来年のために・・・と、丁寧に扱って、大きな物置に仕舞うのだった。いつまでも水遊びしている子等の声が、波に乗って聞こ

えてくるようだったという。秋風の吹き出した頃、子どもらと砂浜をあるいていくと、

「先生よ。大昔はこも海とつながってたんだぞ」「俺らに恵みをいっぱいくれる湖だ。大事にすんだと、父ちゃんが言うんだ」「そうだな」と、

事故もなく終った夏をありがたく思うのだった。

盆が過ぎ、夏休みも終ると、又賑やかな声に包まれる。駅まで送ってくれると言つて四、五人付いてくる。駅で待つてる間、

「芋喰つべ、婆ちゃんが蒸かしてくれたんだ」と、新聞紙を広げる。食べてる途中で電車がくるとカバンに押し込み、口に押し込む。そして子供らは右に家路を急ぐ。I先生の乗った電車は左にと別れていった。

彼岸には女の子達が花を沢山くれた。

「先生んちも佛さまあつべ」と、

十五夜の晩

「先生、団子ねえのか」と叫ぶ声がする。

「なんだ、つまんね、ほかで稼いでくつべ」と、声だけが残つて・・・。

子供らの帳面を見ていると窓を叩く音がした。

「まあーだ仕事か。一緒に遊ぶべと思つたのに」「だめだ、今日終らせなくちゃ明日渡せねえから」「けちんぼ、けち、けち、もう相手にしめえ、みんな行くべ」

と、潮がひくように帰つていった。静かなうちに能率あげなきや・・・と、残り仕事に向かったが、急に静かになった空気に何か悪いような気がしたこともあつたという。

ある朝のこと
「今日はみんな休みになるよ」

と、女の子が知らせに来た。土左衛門が上ったから、みんなで手伝うんだよ」いう。校長に伝え、留守番残して出ていった。風のある日は舟は出さないわけだが、途中、風の悪戯で流されてくるのは大井戸の漁師か八木の漁師が多いんだとか。役場の人も出てきた。

「村長、手伝うんならいい服じゃだめだ。仕事になんねえから帰つてくれ。水を吐かせろ。火早く焚け。子供ら焚き木集めてこい。湯沸かせたか。体温めてやれ。この舟は大井戸のようだ。大井戸へ使いだせ。飯炊く用意だ。」

大声が飛び交う。指示する人、声かけあう、決められているかのような仕事ぶりが展開されていく。お巡り来たか、医者は呼びに行つたか、坊さんは早い。いや手をかりつべ。ところでこの人一人か。一緒に乗つてた人はそこらに流されてねえかの声に、「もう両隣り村に知らせに行つた。」と、そして無事命が戻つた時は大喜び浜辺一帯が喜びの声と、抱き合う人々でうまつた。泣き声までも波の中のものにのつていた。大井戸から舟がきた。人が走つてきた。自転車がきた。

「ありがてえ。よかつた。働き手だからよかつた。」
「いがつた。いがつた。いっぺい心配してたつべよ」

握り飯が配られた。子供らも一人前の働きだ。みんな三々五々と散つていった。
「先生大変だつたなあ・・・」

と子供らが握り飯を一ケもつてきてくれた。
「先生よりお前の方がお疲れだつたな。餅焼いといた。食べる」
長い長い一日だつたように思える。一人の人間に對する思いが村あげて、子供から老人まで隣地区

までに声かけて、これは地域あげての教育の場だと、子供と教師だけでない幅広い、深い教育の現場を見た思いだつた。という。こういう事故は何回かあつたそう。手をつくしても助からなかつたときは、坊さまと村人が隣村境いまで送つていった。子供も大人も声もなく付いていった。先生こん時、医者さまだの坊さんに金やんのかと聞く子もいて戸惑つたことがあつた。

次々にいろいろあつた。

「先生よ、明日村に嫁さんが来んだと、昼頃、神社の太鼓がなつたら行くべ」

「だめだ、勉強がある」
「いかつべ、見てすぐ帰つてくんだから。きれいな嫁さんだぞ」

「たかしときいこはいいな。明日学校休んで酒注ぎやんだもん。いいな。休んで勉強しなくていいな」

「そんなこと言うんじゃない」

子供らの上手な誘いについてい負けてしまう。駆け足で行つて駆け足で帰つてくることにした。

「先生もいつか嫁貰うんだつべ」

とひやかす。

次の日は昼休みの中に山道を子供の大將になつたように走つた。村の人も多勢いきていた。

「あら、先生も来たのか。うんだな、若いもん関心あつべ。」

顔が赤くなるのが分つた。恥ずかしくて顔が上げられなかつた。すると、気を利かせた子が

「おれらが先生を連れてきたんだ。先生に頼み込んでな。おれらだつてずつとずつと先に嫁貰うべ。千代子がいいな・・・」

「そうか、よく考えてな。偉いな」

とうとう千代子は「いやだよ」という。おばさん達は大笑いだった。

静かな日常生活が続いていたある晩。

「先生、今夜は宿直か」

「どうした」

「父ちゃんと母ちゃんが大声喧嘩している。爺ちゃんと婆ちゃんがいくら止めても収まんねえ。母ちゃんは、「こんな家にいらねえ、出ていく」と荷物まとめてんだ。おら、母ちゃんがいなくなったら生きていかねえ」

「じゃどうする」

「うん」

「うんではだめだ。しつかりしろ。一晚中泣いてか。怒りちらかしてつか。それとも母ちゃんについてくか」

「今先生と話していて、父ちゃんと母ちゃんに効き目のある方法を考えたから、よしわかった。俺は男になる。先生心配すんな。俺が決めるっから」と帰って行った。

次の日晴れ晴れした顔で登校して来た。

「俺は果たし状を突きつけたんだ。よかった。今朝帰って来た。俺には何も言わなかったけど爺ちゃんと婆ちゃんには二人で謝ってたよ。

爺ちゃんと婆ちゃんは、「俺らの葬式だけは出しとくれな」と、言っただけだった。先生よ、二人に出したお灸は効いたぞ。何だと思う。種明かしすつか。先生と別れてかえってから言っただんだ。

「父ちゃん、母ちゃん二人とも出て行ってくれ。俺がこの家の主人になって爺ちゃんと婆ちゃんと妹の面倒みっから。育てっから。早く出て行ってくれ。二人一緒でもいいし、別々でもいい。早く行っってくれ。」と大声で。体中の力を振り絞って怒

鳴ったんだ。お陰で声がガラガラでのどが痛てえんだ」

「そうか、そんないいお灸があったのか。甘えん坊のお前がよく考えたな」

「考えたんじゃねえ。破れかぶれの体当たりだ」

「そうか、よくやった。さあ褒美だ」

と飴を二つ渡した。

懐かしい夏だ。あの学校での楽しかった数年は人生の足場となった。あの時間は戻ってこない。あの湖の情景は戻ってこない。湖も生き返らない。あの時の子供たちはいいおじさん、おばさんになったろう。会ってみたいと遠い日なつかしむ。私が釣り好きになったのは、湖に人とかかわりがあったからかもしれない。

玉里の方から行って沖洲に入ると“ほほえみの丘”がある。大分お金をかけて作った砂浜がある。公園もあって一休みできる素晴らしい所だ。妹の孫、私の孫を連れて水に入って遊んだが、濁った水で以前の霞ヶ浦、ましてや御留川時代の水ではなかった。この地区の人の心は故郷を愛して今もやまない努力をしている。



新鈴が池物語 (2008)

兼平智恵子

桓武天皇(七八七〜八〇六)の曾孫高望王は平の姓を賜り、寛平(かんびょう)元年(八八九)上総国(千葉県)の介に就任しました。

この就任が桓武平氏の成立であり、東国(関東地方)との係りの始まりであると言われている。

高望王の子息等の相次ぐ下総国、常陸国への就任、そして鎮守府將軍(古代、蝦夷を鎮撫(ちんぶ)するために陸奥国に置かれた官庁)への任官歴など、桓武平氏の東国との関係を窺い知ると言う。

平高望の子、平国香(良望)は承平元年(九三二)初代常陸大掾となりましたが、弟の良将(平将門)の父の死によつて、遺領問題や甥の将門の女性問題などで対立し、源護一族と結び将門を討とうとしたが承平五年(九三五)野本合戦に敗れ、将門に石田(筑西市東石田)の居館も焼き払われ奮死してしまいました。

しかし国香の子貞盛が藤原秀郷と共に将門を討ち取った事は有名(九三九、承平・天慶の乱)。

その後貞盛の甥(貞盛の弟繁盛の子 維幹(これもと)が常陸大掾に任命され、連綿二十四代にわたって続く事となります。このように「大掾(だいじょう)」とは、もともと役職名であったがそれが世襲される事により大掾氏という家名となった全国でも珍しい例となっています。

こうして平安の世から隆盛を極めた時代も過ぎ去り、戦国の世、天正一八年(一五九〇)、府中に野心をいだいていた北方の豪族、豊臣秀吉からの朱印状を受けた佐竹義宣によつて府中城は攻め滅ぼされてしまいます。

これから紹介しますのは最後の二十四代常陸大掾府中城主、大掾清幹（浄幹）十八歳と鈴姫（園部城（旧小川町）主 園部河内守の息女）十六歳、清幹にとつて岳父である園部河内守、鈴姫の父の軍兵が佐竹勢の先手になって攻め入った、悲しくも壮絶な最後が伝説として残されています。

石岡市史より 鈴ヶ池片目の魚

天正一八年一二月佐竹の軍勢は園部の軍兵を先手となし、府中城ふかく攻め入った。園部城主園部河内守の息女鈴姫は、近郷まれなる美貌の持主で、ことに瞳は鈴のように美しく、その容姿は近隣にたぐいぬい美女、大掾清幹一八歳の美丈夫、花も恥じろう十六歳の鈴姫をめぐり、両家の行末万々歳、と祝いことほぎしも今は夢、舅の軍兵は佐竹の手勢となり、わが城郭に攻め入るとは、昨日まではわが舅わが味方、今はわが敵わが仇、裏切られた無念さ遣るかたなく、怒髪天を衝く形相もの凄く清幹は遂に鈴姫に迫り、「おのれ鈴姫、今を限り妻でなし、思いしれッ」とばかり手にした刀をもって、鈴姫の片目を突きさした。そして清幹は燃えさかる炎の中に身を投じた。鈴姫はおのが片目の醜さを恥じ、人の世の頼み難きに生きる望みを消え失せて、館の焼けおちる火明かりを背に城中の池にたどりつき、数々の恨みをのんで身を投げたという。鈴姫の重なる恨みがこもったのか、それ以来、この池にすむ魚はみな片目であるという。そして、この池を誰れいとうなく、「鈴ヶ池」と呼ぶようになった。

故白井代表いわく、『古里とは十世にわたって口に伝えられるものある里である。口伝えられる

ものとは物語であり、物語とは未来への希望なのである』

伝説物語に語られている教訓を現代に即した物語に創作して伝え残していかなければと。

また『ふる里とは、恋の降る里であり物語の降る里』も織り交ぜながら創作物語三十余りの中で、鈴姫物語は朗読者白井代表、手話舞小林さんにとつて渾身の作、小林さんの一八番物、まるで鈴姫が乗り移ったよう。記憶では六く七回もの公演、その都度演出変えての熱の入れようでした。ここで創作物語の紹介です

朗読舞劇 新鈴が池物語（2008）

風の会文庫 白井啓治著

演武・居合道日本一となった池田忠男さん、オカリナ奏者野口喜広さん、パークシジョンの矢野恵子さんをお迎えしての公演。



貴女は誰ですか
澀んだ池の蛇ですか
疎まれて嫌われて
恨みつのつて……
もう、終わりに
しましよ
やつれた姿の
みえてます

いつも地獄ですか
紅蓮の大蛇（おろち）の舌ですか
負け戦城落ちて一人残って……
もう、誰もいません
雄叫びも遠く消えています



醜い姿ですか
情念に狂う蛟（みづち）ですか
毒を吐いて命奪って呪い続けて……
もう、城跡はありません
貴女の名さえ知りません
（詩・打田昇三）



参考資料 石岡市史
常府石岡の歴史
歴史散策コース案内

○ほっそりと秋刀魚かわいそう
智恵子

善光寺

小林幸枝

私の友人から半壊した善光寺を観光したいと連絡がありました。そこで写真を見たらまさにビックリでした。

出かけてみると、石岡市八郷地区太田にある廃寺「善光寺」は、「善光寺の楼門」が国指定重要文化財に指定されていて整備されていますが、奥の高台にある善光寺本堂の方は屋根を瓦にしたためか、その重みで半壊し、手が付けられない状態で残っています。

右側部分と後ろ側も綺麗に崩れ落ちていました。森の中にポツンとたたずむ善光寺本堂はちょうどお寺の右半分だけが壊れて、見方にもよりますが、廃墟特有の美しさを感じてしまいました。国の重文である入口に立つ楼門は、茅葺き屋根が美しく、中にいる仁王像も大きく力強いです。その楼門を入ったところには池や盆栽がありきれいです。

半壊の状態のまま維持されているのはきつと理由があるだと思いますが、訪れる時には、規制線の中に絶対に入らず、霊的なものにも十分注意して下さい！

新たな挑戦

7

菊地孝夫

書き終えた原稿の製本がいつかな進まない。常陸旧地考は私家版として数部は試みに作ってみたけれども、

ここにきて、当地茨城県も、新型コロナウイルスに蔓延地域となり、非常事態宣言化にある。

東京から周辺地域に感染が拡大するのは、わかりきったことだったのに、かかる事態となってしまう。

日本全土の半数ほどの県が緊急事態下にある。中央政府は相も変わらず、「宣言」の小出しに終始している。

もはや全国が緊急事態となっているのに、まだこの体たらくである。

流行が始まって二年たつのに、何ら有効な手立ても講じられてはいないのが現状。

このウイルスに対して、甘く見ていたとは思えない。

「コロナに打ち勝つ」とか大層威勢のいいことを、おっしゃっていた。

こういうときに、解ったようなことを言う評論家たちも、さすがに沈黙してしまっている。彼ら、彼女らに、基本的な科学的知識が欠落しているせいもある。

事態の展開の予想外の速さに全くついていけない。

中国、韓国の初期の対応をしきりに冷笑していたけれど、いざ日本で大流行し出したら、途端にだんまりを決め込んでしまいましたね。

八月に水戸市に行ったのですが、日曜日にもかかわらず、人手が少なかったように感じた。

あいにくの曇り空ではあったけれど、気温は30度を超えていた。小さな会場の集まりに着くまで、20分ばかり歩いたがすっかり汗ばんでしまった。集まりの出席者も以前の半分ほどに減ってしまった。

このご時世では致し方のないことだろうか。

普段ならば図書館に行けばいいのだけれど、休刊になってしまっている。九月末までの延長となってしまう。

〈オリンピック〉

二年前には、今日の事態を予測した人は少なかった。いざれ近いうちに収束するだろう、ということ、東京オリンピックが一年延期となって開かれた訳だ。

（開催反対の多くの民意を振り切つてまで。様々なスキヤンダル、醜態が数多く露呈されたにもかかわらず。）

けれども、物事の都合のいい解釈が、これほど見事に外れるのも珍しい。

例年行われている、終戦記念日の式典も、縮小して開催された。

オリンピック・パラリンピックの総括はどうなったのだろう。メダルの数やメダリストの紹介ばかりで、新型コロナウイルスとの関連性などは、取り上げられていない。

感動した、素晴らしかった、という幼稚極まる感想ばかりが取り上げられ、無責任な民意はオリ

ンピック礼賛へと移行した。あれだけ連日報道されれば、否応なくオリンピック万歳、になるのは当たり前の話かも。

一時の熱狂が去った今、大人なら冷静に振り返り考える必要がある。

7000人余りの医師や看護師などの医療関係者が、オリンピック・パラリンピックに動員された。医療関係者が、全く足りていない首都圏で、これほど大量の人員が、たかがスポーツ大会の為に動員された。これによって、治療に支障をきたしたのは、解りきったことだろう。この一つをとっても、あつてはならないことだろう。

800人ばかりの感染者があつたということだが、そんなものじゃあないだろう。

責任者たちは、いったいどう責任を取るのだろうか。

ほんとうに「安心・安全」な大会だったのだろうか？？？

私には、空前絶後の醜いオリンピックとしか見えなかった。

出口の見えないトンネル。いつになったら明るい光が見えてくるのだろうか。

多くの人が、口には出さずとも鬱屈した思いを抱いていると思う。

いつのまにか、気付いたら感染の流行が終わりになっているのだろうか。

〈アフガニスタン〉

話は違うけれど、アメリカ軍がアフガニスタン

から撤退した。20年にわたる介入も、失敗に終わった。かつてのベトナムからの撤退を彷彿とさせる。同盟諸国も、日本、イギリスなど続々撤退。アルカイダの支配下となった。

9・11から20年。

テロとの戦いと言っているけれど、これは表現の誤り。イスラム原理主義とキリスト教原理主義との戦いというべきです。当時のブッシュ政権下のアメリカは、どんどん右傾化していきました。

500兆円を超える戦費と、7000人余りのアメリカ軍の戦死者。利益を得たのはユダヤ資本をはじめとする、軍需産業のみ。

共産主義と資本主義の対立という、第二次大戦後の構図が、ユダヤ・キリスト教とイスラム教の対立という構図に置き換わっただけ。背景には石油資源の争奪が大きく存在している。

アフガニスタンには石油資源がないから撤退したけれど、中東からは撤退できないのである。

少なくとも、常識として、このくらいの認識は持つべきだろう。

「大量破壊兵器の存在」などという在りもしないでたらめな口実で、イラクを攻撃した。日本のマスコミもこぞってこの大ウソに乗った。

「大量破壊兵器」を保有しているのは、アメリカなどの核大国だ。

こんな単純なことすら、当時のマスコミは見抜けなかったのか。

現在のコロナ報道、オリンピック報道にしても、十分な検証もなく、フェイク・ニュースを垂れ流し続けている。

取材力が不足しているのではなく、ニュースソースの解析ができていない。

秋の気配の迫る国府公園で、この原稿をまとめている。金曜日の正午、誰もいなくて、セミの聲、風の音だけが聴こえる。

政府・自民党は次の衆議院議員選挙を控えて、てんてこ舞い。菅・現総理では勝てないとみて、交代となったのだろう。

総選挙を控えて、町には宣伝カーが繰り出す。全く無用の騒音でしかない。

私は、現行の選挙制度には懐疑的な考えです。小選挙区制度しかり、政党助成金制度しかり、議員定数しかり。被選挙権年齢も、もっと引き下げべきです。

21世紀となったのだから、旧態依然とした制度は、改めるべきです。

議会制民主主義体制も、現況に合わなくなってきたのではないのだろうか。

資本主義制度自体、もはや実情に合わなくなってきた。

欧米の大富豪たちのドキュメンタリー番組を見ていて、ふとそう思った。

余りにも「常識」に欠ける大人が増え過ぎたように見えるので、言わずもがなのことを書いてしまった。

新たな挑戦として、スマートホンで辛口の意見をいくつか呟いている。賛意はあっても、何処からも反論は帰ってこない。

毎月違ったテーマにて書かせて頂きます。

今月のテーマは、「言葉」

このテーマについては、少し思考を巡らせるだけでも思いつく事が沢山ありますね。

感謝・感激・感動・歓喜・叱咤・激励・希望・後悔・暴力等々。

人間が人間たらしめる1つのコミュニケーションであり、日常多くの人が意識せず使用しているものです。

関連ワードの多さにも、言葉が全世界的に大きな要素をもたらし、必要不可欠なものである事が分かります。

だからこそ、言葉にするには、よーよく考えて発せねばなりません。

その人の置かれている立場・状況・心理状態等を配慮せず、適当に無意識に発した言葉によって、その後の展開は大きく変わっていくものです。無神経に或いは考え無しに、ぼっと出た言葉はあなたにとって、相手にとって、一生忘れられないトラウマであったり、深い溝となって関係を壊してしまいかも知れません。

皆さんも一つや二つは経な験しているのではないのでしょうか。

こんな事言うつもり無かったのに、そう言うつもりでは無かった。など。

後悔先に立たず、今となっては後の祭り。なんて事、あったのではないのでしょうか。

かくゆう私自身も、例を見ずにその一人です。

良い事ってあまり記憶に残らなかつたりしますが、悪い出来事はしっかりと夢に刻まれ、日々のふとした瞬間に蘇ることもございます。

争い事のきつかけにもなりうる訳ですから、なおさら言葉選びには慎重を期す必要がありますよね。たった一言が相手をドン底に落とせると同時に、たった一言が相手の人生に救いを与える事も出来るのです。

有効的なのは、素直な感謝の気持ちを言葉にする
と良いですよ。

言いたくても、照れくさくて言えない相手、自分との距離が近ければ近いほど言い難いはずですよ。

例えば、普段からお世話になっている、両親・兄弟・姉妹・友人。

ですが、想っている事は言葉にして初めて相手に

正確に伝わるのです。

言いたくても言えない、照れくさくて言えない、なんて方は、一度勇気を振り絞って発しましょう。最初の一步さえ踏み出せば、後は淀みなく清流の様に言葉は出てくるはずですから。

ここで重要なポイントは、一度言葉に出来たら、日々の何気ない事にも常に感謝し言葉にして、都度相手に伝える事ですね。

一度言ったからもう良いや、なんて思っていると、次にはまた勇気を振り絞った状況になりますよ？

いつまでも有ると思うな親と金、親の心子知らず。等のことわざにもある通り、大切なものがなくなってしまうから、大きな後悔を持つのではなく、日頃から親に限らず感謝の言葉を口にする、親切にされたらそれを返す気持ちで、相手の良い所を褒める癖をつけるのも一つかも知れませんね。

勿論そこには感情がついてきます。

怒った顔で感謝する人はいませんし、優しい笑顔で怒る人はいません。

心を込めて言の葉にのせる。

単純そうで難しそうな、奥が深い言葉を、伝えるべき時にちゃんと伝わる様に、日々の研鑽も時として必要ではないでしょうか？

今回は次月に続きます。それではまた。

【風の談話室】 《読者投稿》

不來方こずかたの

京都府木津川市 今井 直

岩手県・盛岡城址にある石川啄木の歌碑には多くの人が訪れる。

不來方のお城の草に寝転びて
空に吸はれし
十五の心

悩み多き少年時代を振り返った歌で、百年以上の歳月を越えて愛唱されてきた代表作のひとつだ。「空に吸はれし十五の心」——凡人にはとても思い浮かばない言い回しであり、盛岡城ではなく「不來方のお城」という古称が詩情をかき立てる。神童と呼ばれた啄木だが、盛岡尋常中学校では授業に飽き足りないのか、サボり癖がついて勉強しなくなってしまう。世間の常識から逸脱するのは、天才と言われる人にはよくある話だ。後に妻となる節子と出会ったのもこの頃で、多感で傷つきやすい思春期である。理由もなく大人に反抗したり、将来に対する不安や焦りや苛立ちなどは、当人でも説明がつかない年ごろだ。

中学校の目と鼻の先に盛岡城跡があった。啄木は教室の窓から抜け出して城山に登り、読書に耽っては昼寝の夢を結ぶという気ままな日々を過ごしていたらしい。草の上に独り寝転んで青い空白雲を眺めていると、学校や教師に対する反発や思春期にありがちな自意識とか戸惑いなどが、す

べて大空に溶け込まれる心地がして、気持ち落ち着かせることができたのだろう。だが不登校と成績不振・カンニングを咎められ、学校を中退してしまう。

啄木が周囲の猛反対を押し切って、初恋の節子と所帯を持ったのは十八歳。社会人としてはどうにも仕様がなないダメ人間で、就職しても長続きせず東京や北海道の各地を転々と移り住む。先輩や友人に借金しては遊興に費やし、さんざん迷惑をかけた。しかし、彼の文才を認める人は多く、金田一京助を始めと謝野鉄幹、野村胡堂、若山牧水、土岐善麿らは啄木を見捨てなかった。創作活動の挫折に加え貧困と病苦の狭間で、啄木は繊細で瑞々しい感性溢れる珠玉の作品を世に遺した。『一握の砂』『悲しき玩具』である。短歌を三行書きという特異な表記法で、日常生活の機微を平易な言葉で表現したことが、老若男女の心をつかんだ。実生活では、

はたらけど
はたらけど猶わが生活くらし楽にならざり
ちつと手を見る

更に長男が生後三週間で夭逝。苦難を極めた。

かなしくも
夜明くるまでは残りぬ
息きれし児の肌のぬくもり

明治四十五年(1912)に、石川啄木は肺結核により生涯を閉じた。享年二十六歳——余りにも短すぎる人生だ。最期を看取ったのは身重の妻と老父と若山牧水だった。その翌年、節子も後を追うように同じ病で他界した。

昭和の時代には、啄木の歌に影響を受け換骨奪胎した歌謡曲が幾つか作られた。

いたく錆しピストル出でぬ

砂山の

砂を指もて掘りてありしに

石原裕次郎のヒット曲『錆びたナイフ』だ。

呼吸いきすれば、

胸の中にて鳴る音あり。

風(が)らしよりもさびしきその音！

眼(め)閉(と)づれど、

心にうかぶ何もなし。

さびしくも、また、眼をあけるかな。

へ蒼白き頬のまままで 我は行くさらば昂よ……と歌い出す人がいるかもしれない。谷村新司の『昂』はパクリだと指摘されるのも当然だろう。だが、《谷村新司は啄木をリスペクトし、『悲しき玩具』にインスパイアされた結果、『昂』は啄木作品をオマージュして作られたトリビュート作品である》と、カタカナ用語で片付けられている。『昂』が広く海外でも愛されたのは、服部克久によるスケールの大きな編曲の素晴らしさに負うところが大きい。名曲であることに変わりはない。歌は共有財産であり、心に響く言葉ならば誰が使ってもよいのだらう。



「不來方」は、かつて盛岡市一帯を指す地名だった。昔、この地に悪事を働き里人を困らせる鬼がいたが、地主神がこれを退治した。降参した鬼は二度とこの地に来ない証として岩に手形を残し

て立ち去った。これが「岩手」という地名の由来で、「鬼がもうやつて来ない方面」から「不来方」と呼ばれたのである。江戸初期に南部氏(外様大名・十万石)の居城となり、盛岡城と名称が改められた。

盛岡城から四越ほど西南西に、もう一つ城がある。「志波城(しわじょう)」である。石垣が築かれて荘厳な盛岡城と異なり、田園に囲まれひっそりと佇む城跡だ。「砦」という方がふさわしい。古代、奈良に都を置く朝廷は、辺境の地にまで律令制による中央集権支配を進めていた。東北地方は畿内から見て東山道の奥に位置することから、『和名抄』では「陸奥」に「ミチノヲク」とルビをつけている。

奈良時代前期には、陸奥國の国府として多賀城(宮城県多賀城市)が造営され、異民族に対する前線基地だった。

朝廷は武力行使で領域の拡大を謀るが、先住民族は必死に抵抗した。彼らは「蝦夷(えみし)」と呼ばれ、「未開地の野蛮な異民族」という蔑称だ。先住民は必ずしも野蛮で凶暴だったわけではないが、朝廷側は勢力拡大の正統性を示すために、『蝦夷征討』と正史に記している。

平安時代初めに、北上川を挟んで朝廷軍と蝦夷軍の戦闘が幾度となく繰り返された。数万人もの兵を擁する朝廷軍は蝦夷側のゲリラ戦術に手こずって戦いは十三年も続いた。そして遂に、桓武天皇が征夷大將軍として派遣した坂上田村麻呂により蝦夷の反乱は制圧された。降伏した蝦夷の族長・阿弓流為(アキナガ)は京の都に押送される。敵同士ながら二人は互いに心を通わせる奇妙な友情で結ばれていたという。田村麻呂は阿弓流為の器量を認

めていて、朝廷に彼の助命を嘆願したが許されず、阿弓流為は斬刑に処せられた。

阿弓流為の本拠地だった胆沢(いまむ(奥州市水沢)には、蝦夷を監督・統治する目的で胆沢城が築かれた。そして更に古代陸奥國では最北端の地に志波城も造営された。これは最大級の城柵官衙(じょうきく)がなかんであった。朝廷に服従を誓った蝦夷は「俘囚(ふしゅう)」と呼ばれ、租税を免除されたり官衙(役所)で政務に就く者もいたようだが、朝廷に不満を抱く俘囚も多く、その後も何度か反乱蜂起が起きた。彼らは「もう来るな」との強い意志で、京の都を「不来方」と呼びたかつたに違いない。

「日本の城」と言えば姫路城や松本城を思い浮かべるが、絢爛豪華な天守閣などは安土桃山時代以降の建築だ。だから城といえど古代城柵は随分地味である。石垣もなければ高層の建物もない。志波城は東北自動車道建設に伴う発掘調査で遺跡が見つかるまでは、だだっぴろい農耕地にすぎなかった。それが重要な歴史遺産として国の史跡に指定された。現在は広大な敷地に外郭南門や全長二百五十メートルにおよぶ築地塀や物見櫓などが復元整備され、坂上田村麻呂が築城した当時の姿を偲ぶことができる。

志波城古代公園からも美しい岩手山を遠望できる。まさに風光明媚!うっすらと冠雪した山を飽きもせず眺めていると、ふと啄木の歌を思い出した。

ふるさとの山に向ひて

言ふことなし

ふるさとの山はありがたきかな

啄木は城址でただ空を見つめていただけではあまるまい。盛岡城跡から岩手山の秀峰を眺めるだけでも、ストレスの解消ができただろう。「ふるさとの山はありがたきかな」。啄木は初めて盛岡を訪れたのに、堂々たる岩手山は何故か懐かしく、山に吸い込まれるように、時を忘れて見入ってしまった。後期高齢者の私はもはやナイーブな「十五の心」を持ち合わせないが、みちのく不来方の城跡で岩手山に向きあつて、遙か遠くに置き忘れてきた「十五の心」をわずかばかり思い出した。「山に吸はれし七十五の心」と、つぶやきながら私の史跡巡りの旅はまだ続く……

(参考文献)

- 荒正人 編 『石川啄木』 河出書房新社
- 盛岡市 観光文化課HP
- 胆沢城跡歴史公園
- 志波城古代公園 展示室
- 宇治谷孟 著 『続日本紀』 講談社



一猛暑も峠を越し、雨も上がり、久々に長閑な日
が……。多くの田圃では、稲刈りもほぼ終わり……。
なぜか子供の頃の記憶と重なり胸キュンと……。

・9月最後の日。せまりくる台風16号心配です
ね。大したことないといいますが。アケビの実が
もうすぐ口を開きます。ポポの実は食べ頃。いい
香りがしています。

・わが部落の長老さんが言うには、田植えがだん
だん早くなり、その分稲刈りも早くなった……。
と。昔の稲刈りは、足が冷たかった！なんて話し
をしていた。

・椎茸が大変な事になっていた。裏庭の原木の木
から、手の平ほどもある椎茸が20個も……。その
上小さい椎茸もたくさんついてた。ここ数カ月
は何の音沙汰も無かったのに、急きよ油揚げやさ
つま揚げ、そして少し濃い目の味つけで煮てみた。
明日は酢飯で混ぜご飯でも作ってみよう。

・毎日まいにち、雨が降ったり止んだり、地盤も
だいぶ緩んで来た。先日散歩中我が家の畑の大き
な杉の木が倒れ、道を塞いでいた。幸い車が殆ど
通らない処なので、犬の散歩などでは通るかもし
れないが……。ほっとけないので雨模様の中、
チェンソーを持って2人で出かけた。結構な太
さの杉で、二カ所をチェンソーで切り落とし、
真ん中の道路は通れるようにした。今日はこま
まどと、夫は息をきらしていた。体力無くなったな

ーとぼやいても、田舎暮らしでは何でも出来な
ければ暮らせませんネエ？

・8月も終わるころ、今年は暑い夏でした……。
そして、早速庭の栗が弾けていたので、慌てて栗
拾いの日々……。暫く会っていない友達に送っ
たり、近くの友達が採りに来たり楽しい日々です。

・朝から「いちご園のお手伝い。50メートルのハ
ウスにいちご苗の植え付け。12月頃から来年5月
頃までが収穫期です。美味しいいちごに育つよう
一本一本心をこめての植え付け。それにしてもハ
ウスの中は暑い、いい汗をかいた。そして楽し
みのランチ、皆で食べる食事は美味しい。おにぎり
に栗おこわ、のり巻き、おいなりさん、もつ煮込
み、サバ塩焼き、天麩羅などなど何時も乍らお土
産たくさん頂いて帰ります。

・雑草防止に植えたりゆうのひげが草に覆われて
しまった。毎日今日こそ、今日こそと思いつながら
やつと重い腰をあげた。ひたすら草を抜き、だん
だんきれいになると、気持ち軽やかになってき
た。早く友達に会える日などを考えながら、今日
のノルマは達成した。我が家のりゆうのひげは、
タマリユウかもしれませぬ。繁殖は、りゆうのひ
げより緩やかです。

おすすめの本 7

燕石(えんせき)

厄介なことに、この石岡市もついに非常事態と
なってしまうました。

新型コロナウイルスの対応で、市立図書館も、
九月いっぱい休館となってしまうました。

それで、新たに読書することが不可能になっ
てしまった。本を購入すればいいのだけれども、財
政的な理由でそれはかなわない。

かつて乱読した本の中から、面白そうなもの
を見つろってみましょうかね。

(私自身のルーツ探しは、江戸中期で一旦スト
ップしたままになっている。さらに遡ると、面白い
人物に辿りつきそうな気もする。)

活字離れが進む今日、ここでわざわざ本の紹介
をしているというのも、世間の風潮に逆らうとい
う、生まれつきの天邪鬼気質のなせる業かもしれ
ませぬ。

〈コロナについて〉

今度の新型コロナウイルスのパンデミック(大
流行)についてはどうやら著者の見解が正しかっ
たようで、到底一朝一夕には収まりそうもありま
せん。

未知の病原体に対して、人体には抗体や免疫が
存在しない。

政府の掲げる、ワクチンや対応策も、その実効
性には疑問符が付く。かつての、エイズウイルス
に対する対応を例にとっても、解ると思う。

最近のニュースでは、ミュー型変異株まで見つ
かっている。13番目のウイルスである。これに
は、現況のワクチンの効き目もあまりないという

ことらしいし。

日本の名の知れた研究機関や製薬会社にしても、「なんだ、この程度の能力か」という感想しかもてない。

製薬会社が、過去にどんなひどいことをしてきたか知っているの、薬剤に対して根強いアレルギーを持っている。

思い出してほしい。来航した観光船の対応。船内に閉じ込め、密集状態にさせたために、出さなくてもいい多くの二次感染者を産んでしまった。それだけでなくも客室は狭いし、第一換気も十分ではない。この初動体制の誤りを、何ら教訓としていない。「発熱4日ルール」というのもあった。これには何ら根拠がなかったことが、後日証明された。

その程度の事しかできなかった人々の推すワクチンなど、到底信用できない。

副反応などと言っている副作用や、発表された効果よりもずっと低い効果しかないことも続々わかってきた。

周囲の人からは、早くワクチンを打った方がいいとしきりに勧められる、今日この頃です。

「知人の縁者も、コロナでなくなったと聞きました。」

もしかしたら、新しい特効薬かワクチンが生まれるかも、というのは、はかない幻想だったようです。

最新の科学技術をもってしても、現在のところ有効な対策は採れていないようだ。人類の科学技術の限界なのだろうか。

仮に、今すぐに有効な手段が見つかったとしても77億人に余る人類すべてにワクチンがいきわ

たとは思えない。

悲観的な見方を変えて、現況の文明の行き止まり感が今回の新型コロナパンデミックによって、打ち破られる可能性に期待したほうがいいのかもれない。

或いは、人体に潜在的にある使われていない遺伝子が、目を覚ますかもしれない。

すくなくとも、全世界に広がった感染の拡大が、人類に共通の認識を与えたことは間違いない。

将来、コロナ禍がおさまりをみせたとき、国や国境を越えた新たな認識が生まれることを期待する。

人類は多大な犠牲を払って、新たな価値観を持つことになるだろう。

〈総裁選挙〉

日本に目を転じてみると、コロナ禍のもと自民党総裁選が行われている。候補の一人、高市早苗は、防衛費（軍事費）の増を上げている。安倍前総理の周りには、こうしたネオコン紛いの女性議員が集まっている。

彼女らには軍事というものがどういうものか、ちっとも解っていない。ただ誰かに言われるまま、中国や北朝鮮からの脅威だのと言っているに過ぎない。

他国の脅威をあげつらう前に、自国内の経済の疲弊や、コロナ対策に見られる如く、科学技術力の劣化を憂うべきである。国土強靱化というのは、土木予算を増額することではなく、今までほった

らかしにされていた、基礎的な学問を甦入れし、先端技術を開発していくことにある。それが成し遂げられれば、はじめて強靱な国力がついたと言える。

軍需産業がいくら伸びても、アメリカのように国家財政が傾くだけである。軍需産業が発展しても、GDPは決して伸びないのだよ。

少しは経済学を勉強してから、総裁選に立候補しなさい。竹中平蔵などの説く経済構想など、時代遅れも甚だしい。

〈オリンピック〉

多くの、反対を押し切って開催されたオリンピック。一部関係者の利益だけの、スポーツ大会。掲げられていた、〈復興オリンピック〉はどこへ行ってしまったのか？

あれだけの無駄な金を費やすのなら、被災地の人々に回すべきではなかったのか。

IOC委員たちの無責任な言動。大会幹部たちの金銭スキヤンダル。イベントーたちの人格の問題。能天気なボランティアの自己満足。運営幹部のコロナ対策のまずさ。当初予算を大幅に上回った運営費。不必要な施設を造りまくった。フードロスも引き起こし、大量の食べられる食品を廃棄した。挙句の果てに出さなくてもいい、コロナ感染者を大量に発生させた。

どれ一つとっても、褒められたものはない。

一旦決まったことは、覆せなくてズルズルと流されてしまう悪しき風潮はこの国固有のもの。

関係者からの反省の弁は一切聞こえてこない。

にぎやかだったセミの鳴き声に代わり、秋の虫たちの声が聞こえてくるようになりました。

今回のおすすめの本は

「人間学講義」岩波書店 カント全集 2002・07・24初版 中島徹訳

平明な訳文は、ほかの訳者と比べても読みやすいです。

外出もままならぬこんにち、秋の夜長のひと時を読書二昧にふけるのも悪くはない。

哲学書というと、難しい文言が並んでいて、固い印象があるけれども、今の時代、人間の生き方を深く考察した先賢の意見に耳を傾けるのもいいことだと思ふ。

カント先生は、コツコツと律儀に考えを進めています。

人は何を考えて生きているのだろうか。

私自身、この論考の総てを読んだわけではないけれども、少しずつ読み進めながら、じっくり考えていこうと思います。

生きていくという、至極当たり前の営為の中で、人類だけが唯一持っている「文字」による情報の伝達という手段によって、一人の人間の持つ叡智が、時間空間を超えて、多くの人に伝わっていく。これは素晴らしいことだと思ふ。

余談ですが、訳者の中島氏とは学生時代からの知り合いです。亡兄の高校時代の親友で、しばしば家にも来て麻雀ばかりしていました。ベルリンに留学し、大学の哲学の先生になりました。

読者の皆様の健康をお祈りします。

【御留川（おとめがわ）便り】 伊東弓子



茨城県の難読地名とその由来 (18)

木村進

鶺鴒 【くぐいど】 坂東市 (旧岩井市)

旧岩井市北部から堺町南部にかけて「鶺鴒沼(くぐいどぬま)」という沼がかつて存在していた。

この沼は江戸時代初期に家康の命により、利根川の流れを銚子の方に付け替えた時に、猿島台地(さしまだいち)の侵食された谷間が土砂で埋まり、川が沼となって残っていたものです。ただ深さも1~2m位と浅く、周囲には低地が広がっていました。

明治42年に利根川左岸の堤防の工事が進み、今まで3年に1回ほどの頻度で洪水が起きていて、水田として適さなかった地であったが、この沼及びその周辺は水田として干拓されて、昭和24年に沼はなくなつた。

鶺鴒(くぐいど)はこの鶺鴒沼と利根川の間台地に位置し、戦国時代の地名に「くぐいと」と書かれていた。

鶺鴒(くぐいど)とは、古語で白鳥のことで、地名の由来もこの沼に白鳥が飛来して群集するため「鶺鴒沼(くぐいどぬま)」と呼ばれ、沼の沿岸にある村ということで「鶺鴒村」となったという。

近くに縄文時代の「鶺鴒遺跡」や古墳時代の「仙入久保古墳群」などがあり、古くから人が暮らしていたという。

洞下 【ほらげ】 つくば市 (旧筑波町)

洞下町 【どうしたちよう】 ひたちなか市 (旧那珂湊市)

那珂湊市)

「洞」(ほら、どう)は「洞穴(ほらあな)」「洞窟(どうくつ)」の「洞」であるので、どちらも読もうと思えばどちらかになるのでそれほど難しくはない。

しかし、この「洞」という漢字はどのような意味

を持つのだろうか？

つくば市の洞下(ほらげ)だが、ここは江戸時代に細川街道(現在のつくば市谷田部と栃木県の茂木町を結ぶ街道)の宿場町「洞下宿」として栄えた。

このため、今も当時の街並みが少し残されている。また古代(縄文・古墳時代)の遺跡(洞下遺跡など)も見つかっている場所です。

細川街道という名前は、つくば市谷田部と栃木県(下野国)茂木の両方を熊本藩の細川氏の一族が領有していたからで、常陸谷田部藩の初代藩主は、細川忠興の弟の細川興元(おきもと)です。栃木県(下野国)茂木の藩主もつとめていきます。

では「洞下」という地名はどのようなことからつけられたのか。洞穴や洞窟の下という意味ではないことは確かだ。

「洞(ほら)」という漢字が使われたのに意味があるとすると「洞は両側かだんだん狭まって、奥が行き止まりになるような谷間」などに多く見られる地名だという。

このつくば市の洞下は東側に桜川と筑波山、西側に小貝川が徐々に迫って細くなるような場所ではあるが、谷が迫ってくるような場所とは思われない。この地名の初見は、1596年の知行目録に「ほらけ」と書かれたものがあるという。また茨城弁の辞書なるものには「ほらんけ＝空洞」とある。

さて、古代文書に使われていることばは主に古代語で、現在のアイヌ語に残されている言葉が多いが、「洞(ホラ)」というのには、「ヒラク」などと同義語で、邪魔なものがない開けた場所という意味があるという。

一方、ひたちなか市の「洞下町(どうしたちよ)」は比較的新しいようで、昭和13年に湊町が那珂湊町になったときには、那珂湊町字洞下とあり、これが那珂湊市となったときには幸町となり、昭和53年に一部が洞下町になったという。幸町ではなく昔の名前「洞下」を残したかったものと思うが、昔から「どうした」と読んでいたのかどうかは不明であった。

ホラ＝秀ラ で優れた、秀でたなどという意味もあつてのかもしれない。何しろ全国にたくさん地名がある。

北海道の洞爺湖の地名由来については、「とうや」はアイヌ語の「トヤ(ト・ヤ)」「湖の岸)に由来する。本来は湖の北岸を指す地名であったが、和人によって洞爺と当て字され、湖の名となった。現在では湖の北岸である本来のトヤは、「向洞爺」と呼ばれている。アイヌの人々は洞爺湖のことを「キムント(キム・ウン・ト)」「(山の湖)と呼んでいた。地元では「どうや」と呼ばれることもある。」とあつた。

ト杭【ぼつくい】 稲敷市(旧東村)

「ト杭」で「ぼつくい」と読む。

「ト」はカタカナの下ではない。トウ(占う)という字だ。塚原ト伝(鹿島の剣豪)のボクだ。

ト杭＝棒杭(ぼつくい) で、「焼けボックイに火がついた」という時に使われるボックイ＝棒杭(木杭)のことだと思われます。

この稲敷市の「ト杭」の場所は常陸利根川と利根川をつなぐ「横利根川」に沿った西側にある。

郵便住所地名では「八筋川」に含まれてしまいま

したが、戦国時代末期の1591年または1600年にこの八筋川地域と共に開拓されて出来た地名です。

このト杭という地名は 利根川を渡った千葉県の印旛沼から霞ヶ浦に注ぐ「長門川」沿いの印西市に「安食ト杭(あじきぼつくい)」と「酒直ト杭(さかなおぼつくい)」という2箇所の地名が存在します。すぐ東が、(千葉県)栄町になり、「安食(あじき)」や「酒直(さかなお)」という地名は共に印西市ではなく、栄町にあります。

また安食(あじき)あたりはかなり古くから人が住んでいた場所です。

この「安食ト杭」や「酒直ト杭」は江戸時代の寛文年間(1661-1673年)に開拓された場所です。その当時はまだかなり沼地だったようです。

それを長い棒杭(ぼつくい)を境界に打ち込んで土を盛って耕作出来る場所に開拓したのでしよう。この江戸時代の開拓で、「安食村ト杭野」と呼ばれていたようですが、この開拓の前から「ト杭野」と呼ばれていたようですので、たびたび起こる洪水のために棒杭を打ち込んで洪水を防止することをやっていた場所なのかもしれません。

ただ、「ト」(うらない)という字が使われていまずです。少し違った意味合いがあつた可能性もあります。もともと「棒」という字も「木を奉じる」と書くように手で捧げられるほどの長さの木片を指す言葉ですから、これが「ト」と同じような意味合いを持つていたとも考えられます。



常陸旧地考 (16)

菊地孝夫

下巻 (九)

○信太浮嶋

名寄鈔に

浦風に潮道のうえも切り晴れて

月になりゆく信太の浮嶋

信太浮嶋、常陸〔國誌〕に載せたり。今の浮嶋

村これ也。風土記信太郡の条に乗濱の里、東に浮

島有〔長さ三千歩広さ四百歩〕四面絶海山野交錯、

戸一十五、畑七八町余、居所百姓、火塩を業と為

す云々みえたり

○會瀬浦 おうせのうら

名寄鈔に

棚織のあふせの浦による浪の

よるとは知れど立ち返りつつ

秋寢覚藻塩草なども常陸とす。今久慈郡助川村

近く会瀬村在りこれ成るべし。

○稲敷里 イナシキノサト

夫木抄に

こいつつもかくて幾世を過ぎぬらむ

かりねならはぬいなしきのさと。

秋寢覚に常陸とする、今ある所を知らず。

ある説に茨城郡の板敷村なるべしといえり。ま

たある説に新治郡の稲吉村ならむかともいえり。

いづれとも定めがたし。

和名鈔に信太郡稲敷郷あり、これによれば稲吉

の方ならむか、なおよくたずぬべし。

○萩原里

夫木抄に

秋ならぬ花に心やとどめまし

霜に枯れたる萩原の里

秋寢覚に常陸とす。鹿島郡のすえつかたに萩原

村在りこれなるべし。

○田邊礪 タナベノイン

懷中鈔に

いつくとしてふみまどわせる玉章

そうらばたなべの礪ならなくに

秋寢覚、藻塩草に常陸とする。

鹿島神宮近くの海辺に田辺村在り。

○波太岡 ハタノオカ

風土記新治郡の条に下野・常陸二国の堺即ち波

太岡とあり、今ある所を知らず。

○笠間村

風土記新治郡の条に、郡より東五十里に笠間村

在り。越通し道路葦穂山、云々とあり。

今の笠間城下これなり。上の笠間郡の条を見合

わすべし。

○榎浦 エノウラ

今ある所を知らず。

風土記信太郡の条に、東は信太の流海、南は榎

浦の流海、西は毛野河、北は河内郡云々。また榎

浦之津に仮に驛家を置き云々見えたり。

郡図を以てかんがうるに、信太郡の南の方に江

戸崎村在り、これなるべし。それは、榎浦を榎崎

と言うのを榎戸崎と誤り、遂に文字をも江戸崎と

書き換えたようだ。この類いは多くある。

○碓井 ウスイ

風土記信太郡の条に、郡北十里碓井あり、古老

の曰く、大足日子天皇浮島の仮宮に、水供えなく

即ち卜者を遣わし、所をたずね穿つ所、これ今雄

栗之村に在り。これに従い以西高來里云々見えた

れば雄栗之村の地内にありしなり。今はあせてあ

るところを知らず。その名さえ伝わらず。

○雄栗村

信太郡に今小栗村在り。これなり。上の碓氷は

この村の地内に在る。

○信筑川

風土記茨城郡の条に郡西南近河有。信筑川とい

う源は、筑波の山より西から東に流れ、郡中を経

て高浜の海にはいるとありいま志筑村の地を流れ

て高浜に落ちる川これなり。この川より北、今は

新治郡に属したれども、古は茨城郡なること茨城

郡の条に言えるがごとし。

○桑原岳 クワバラノタケ

今ある所を知らず。風土記茨城郡条に郡東十里

桑原岳あり云々、新たに清井を掘る。出泉浄香飲

喫尤も好し。勅して「よき溜まり水かな」と言う。

これにより、この里の名いま田餘というとなり、

この田餘は即ち今の玉里村なること田餘郷の条に

言うがごとしである。

さればこの桑原、玉里村の内なのを、早く廢れ

て判らなくなっている。

○槻野清水 ツキノノシミズ

今ある所を知らず。風土記行方郡条に倭武天皇天下狩り巡り海□平らげこの国を過ぎしとき、即ち槻野之清泉に頓ヅ水に臨みて手を洗い、玉をもつて井に落とす。今に行方の里にあり。玉清井という。云々と見えたり。

今行方村の中に無く、尋ねる由もなし

○現原丘 アラハラノオカ

風土記行方郡条に倭武天皇天下狩り巡り云々。さらに車をめぐらし荒原之丘に御幸して御膳つかえまつる云々と見え、

和名鈔に行方郡荒原郷あり、同地なること上の条にいえり。

○無梶河

風土記行方郡の条に、倭武天皇天下を狩り巡り云々、大益河にゆき船に乗りしとき棹梶折れ、それにより河の名を無梶河という。

これ即ち茨城行方二郡の堺の河云々と見えたり。今在地を知らず。

○鴨野

風土記行方郡の条に無梶河より干部陸達し、鴨飛びたるあり。天皇鴨を射て速やかに弦応じ、而して墮ちる。その地所謂鴨野云々見えたり。今在地を知らず。

ある人の説に、いま玉造村の地内に加茂坪有、また小山あり、里人その山を鴨宮という。古へ神社有し地なるべし。これ鴨野なるべし

○榊池

風土記に上の次の文に鴨野うんぬん、往々森々山林をなす。即ち榊池あり。この高向太夫の時築きし池なり。北に香取神子社在り云々。この神社即ちうえの鴨宮なるべし。

○椎井 シヒイ

風土記行方郡の条に難波長柄豊前大宮は天の下しろしめし天皇の世に至り、壬生の連麻呂初めてその谷をトイ、池堤を築きし時、夜刀神池辺の椎の木に集まり登り時を経て去らず。ここに於いて麻呂大声をあげて云々その池、今椎井というなり。池の面、椎株清泉いずる所を取りて池の名とす。即ち香島に向く陸之道驛なり云々見えたり。今ある地を知らず。

○鯨岡

風土記行方郡の条に郡南七里男高里云々。南に鯨岡有、上古海に鯨腹這い來たりて寝し処なり云々、今在所を知らず。

小宮山昌秀の説に、鯨岡は畑木の祖、高尾左中の居住所にて、いま小高村に城址有。社在りて今宮明神という、ここなり。

○栗家池 クリヤノ

風土記行方郡の条に郡南七里男高里云々。國宰當麻太夫の時、池を築いて今路東にあり。池は西の山より猪猿多く住み、草木密に生え、南に鯨岡有云々すなわち栗家池有。その栗大をなす。もつて池の名と為す。北に香取神子社在るなり云々とあり。いま郡中にある所を知らず。

○安婆嶋

風土記行方郡の条に、古老曰く斯貴満垣宮八州しろしめす天皇の世、東夷の荒族平らげんと、建借間命を遣わし(すなわち比那国造の祖)軍士を率いて凶猾を攻略し、安婆之嶋に頓宿す。

遙かに海東の浦を望み、時に畑見ゆる所、人有るを疑い云々。これ国栖、名を夜尺斯、夜筑斯という。二人は自ら首師となつて穴を掘り、堡壘を造る。常に住まう処云々。建借間命、騎士に命じ堡を塞ぐ、其のち襲撃。種属を捉え尽くす。一時に焚滅す。この時いたく殺しし処、今に伊多久之郷と謂う。斬るに臨む所、今布都奈村という。殺し案ずる所安伐之里という云々とあり、

この文によつて考ふるに、賊党どもの撃ち漏らされたる者が、伊多久(今の潮来)より逃れて、河内郡の布都奈(今の古渡村)に渡りそれより、安伐之嶋(今の安馬村)に行きたる道並なり。されば、この安伐嶋は今の安馬村なること決なし

○布都奈

上に言えるごとく今の古渡村これなり。

○吉前之邑

風土記行方郡の条に上の文に続いて殺告、いま吉前之邑を言う云々とあり。いま郡中にある所を知らず。

○藝都里

風土記行方郡の条に、これに従い、以南藝都里古く国栖あり、名は寸津毗、古寸津毗賣二人云々。和名鈔に行方郡藝都郷あり。今所在を知らず。

○屋形野 ヤカタノノ

風土記行方郡の条に郡の東西十五里に當麻郷あり云々。

即ち屋形の仮屋に御幸し云々とあり、この當麻郷はいまの當間村なること郷の条に言えるが如し。さてその村に近きあたりに屋形野といえる地、きこゆることなし。いまある所を知らず。

○小拔 オヌキ

風土記行方郡の条に藝都里云々、さらに輿に乗り廻らし、小抜野の頓宮に御幸す云々とあり、いま郡中に小貫村ありこれなるべし

○宇流波斯之小野 「うるはしのおの」

風土記行方郡の条に上の文に続いて、小抜野頓宮に寸津毘売姉妹を率いて、まことに心力を竭し、雨風を避け、朝夕天皇に供奉しその慇懃疑いなく、惠慈所以、この地、宇流波斯之小野という云々とあり。この地今ある所を知らず。

○波耶武之野 ハヤム

風土記行方郡の条に波耶武之野、倭武天皇この野に宿里とどまりし時弓矢筈を修理せしにちなむ名なり云々とあり、今ある地を知らず。

さて波耶武之野と名付けたる故はユハズによりたる名なれば波耶の耶は須などの誤りにて、はずむの野なるべし。

(続く)

石岡地方のよもやま話

木村 進

(2) 石岡と正岡子規

俳人正岡子規は大学生であった明治22年4月3日から7日にかけて、第一高等中学校(現東大)の友人と2人で同学年の親友であった水戸の菊池謙二郎氏を訪ねて旅行をしています。

当時水戸までは小山経由で鉄道でも行きましたが、本郷の常盤會寄宿舎から水戸まで3日間かけて水戸街道を歩いて旅行しました。

本郷から千住・松戸・我孫子を通って藤代の2軒しかない旅籠の1軒である銚子屋という宿に1泊しました。

しかし、夜は寒くて早く、宿の待遇もあまりよくなく、枕が堅く寝心地も悪かったと書かれています。

翌日は小雨で傘をさして牛久土浦・中貫・稲吉を通って石岡の萬屋(よろずや)に泊まりました。

雨で寒くて気分も滅入っていたのですがこちらの宿は前の晩に比べて待遇がよく、大いに喜んでいきます。

この様子は東京に戻ってから書いた「水戸紀行」の中に詳しく書かれており、当時の石岡の様子がよくわかります。

「・・・石岡は醤油の名處也 萬屋は石岡中の第一等の旅店也 さまで美しくはあらねどもてもなしも厚き故藤代にくらぶれば數段上と覺えたり

足を伸ばしたりかぐめたりしながら枕の底へいたづら書なとす・・・」

当時、まだ常磐線は通っておらず、石岡の町は高浜から霞ヶ浦を経由して東京まで汽船(高浜汽船)が周航していました。このため、多くの商人たちも石岡の宿に宿泊し、街には醤油工場や酒造所の大きな煙突が何本も聳え立っていました。

当時の萬屋(よろずや)旅館は水戸街道沿いになりました。今の石岡駅前の大通り(御幸通り)の突き当たりにあるカギヤ楽器さんの場所近くです。明治34年に発行された「石岡繁昌記」(平野松次郎著)には「旅館 萬屋増三・・・四方御客様益々御機嫌克奉欣賀候、御休泊共鄭重懇篤に御取扱申べく候(本店・香丸町、支店・停車場前)」と書かれています。この本店が子規が泊まった場所です。支店は石岡駅ができて(明治28年)、駅前に支店を作ったと思われる。

しかし、時代が流れ、鉄道が運行されるとしだいに人や物の流れも代わり、汽船が廃れ、この萬屋旅館も止めてしまい、鍵屋玩具店さんとなり、現在のカギヤ楽器とピノキオトイというおもちゃ屋さんに分かれました。

正岡子規は水戸では親友の菊池謙二郎氏が入れ違いで東京に出て行ってしまったために会えずに舟遊びなどをして帰路は水戸線経由で上野まで列車に乗っていますが、元来体の弱い子規は帰京一ヶ月後の5月9日に喀血しこれが後の病に伏せる原因に成ったとも言われています。

子規が石岡の宿を出立した時は天気は回復して筑波山を左手に見ながら水戸へむかい、次の歌を残しています。

・二日路は筑波にそふて日ぞ長き
(歌碑が中町通りの金刀比羅神社境内にあります)

・白雲の蒲團の中につままれて
ならんで寐たり女體男體

水戸の学友菊池謙二郎さんは正岡子規の学生時代の数少ない親友の一人で、藤田東湖を中心とした水戸学の研究で知られ、後に旧制水戸中学校(現水戸第一高校)校長をつとめました。

学生たちには大変親しまれていましたが、当時の天皇中心や家長制度などによらずに個人の独立を説いた思想が上層部に反感を買って学長を辞します。

【特別企画】

打田昇三の太平記(14) 巻第七・1

日本に未だ民主主義が輸入？されていない頃には「南北朝時代」の評価を巡って様々な意見が学者などから提起されていたらしい。そもそも天皇制を柱として「万世一系」を自慢してきた歴史観からすれば「…天皇が南朝と北朝とに分かれ対立していた…」などは、恥ずかしくて口が裂けても言えたことではないが史実は隠せない。そこで大日本帝国は、苦し紛れに北朝系天皇の治世で南朝の忠臣を称える奇妙な歴史観を広め国民に教

育したのであり是は詐欺同然の事と思うが、今迄に其のことを国民に釈明した政府は無い。

「太平記」は往生際が悪い醍醐天皇と統制力を失った幕府とに振り回されながら右往左往していた当時の人々の気の毒な姿を有りの儘に描いて居る。此の国の責任者は誰か？という事が明確では無かった時代であるから、何か行動を起こす場合に戸惑いがあったと思うけれども「大義名分」と言う調子の良い言葉と「一族の行く末」と言う切実な課題とを賭けて、諸国の武士団が或いは幕府軍に付き、或いは天皇に味方して無意味な争いを展開していた。国の歴史としては誠に恥ずかしいのだが、其れを詳細に記録した太平記は皮肉なことになり面白くない長編物語になったのである。

○吉野城軍(よしののしろいくさ)の事

元弘三年(一一三三) 正月十六日、鎌倉の有力武将・二階堂出羽(守) 入道道蘊(にかいどう)が六万余騎の軍勢を率いて大塔宮が籠る吉野城へ押し寄せた。近くを流れる菜摘川の辺りから城の方向を見上げると、周囲の峰には白旗・赤旗・錦旗などが山風に翻って雲か花かと思ふうばかりである。それを取り囲む数千の幕府軍が兜の星を煌(きら)めかして居たけれども、城の在る峯は険しい上に苔が生えて滑り易いから大勢では攻め難い。何万、何十万の軍勢を集めても一気に攻撃は出来ないのである。両軍は正月十八日の明け方から敵の居る方向に向かって適当に矢を放っていた。城の軍勢は地形を知っているから身を隠しながら有効的に射撃が出来るけれども、攻める側は暗闇で戦うようなもので、全く不利である。それでも戦場に来たからに

は何か手柄を立てなければ榮譽が得られない。

昼夜を問わず七日間、真面目に戦っている中で城方には三百余人、攻撃軍は八百の戦死者が出た。是には敵の矢に討たれた人数だけで無く、坂で転倒したり谷底に落ちたり、城から投げ落とされた石で潰されたりした人数が含まれている。

犠牲者は増えるが戦況は全く変わらない中で、攻撃軍の案内役を務めていた吉野山の役僧・岩菊丸が「此の俣では自分の責任を追及される！」と思つたのか、内密に部下を呼び集めて言った。

「…別動隊の大将・金沢右馬助殿は既に赤坂城を攻略して金剛山へ向かったと聞く。此の場所は我々が案内をして来たのだが、未だ落とすことが出来ずに居る。是は城の正面ばかりを攻めているからで有ろう…此の城の後方は金峰山であり険しい峯が続くから護りも嚴重では無いと思われる。そこで山に慣れた足軽兵百五十人を選んで軽装させ闇に紛れて金峰山から城内に侵入潜伏させる。夜明けと共に喚声を揚げさせれば敵は混乱するであろうから其の機会に大塔宮を捕らえよう…」

選抜された百五十名を、金峰山に回してみると予想通りに警備兵は居らず、子供騙しのように大樹に旗が結び付けられている。侵入者は裏山から敵城内に入らせて頂き思い思いの場所で敵兵に護られながら仮眠をとり、夜明けを待った。

約束の時間が来て、攻撃の合図と共に表から五万の軍勢が山城攻撃を開始したので、侵入していた者も是に合せて攻撃に回ったから城内は大混乱に陥る。裏山から来た軍勢はサーブスで城内の建造物に火を掛けて回った。頑張っていた吉野山の僧兵たちも、敵が其処までやるとは思わない。燃え上がる炎と敵の矢に追い詰められて敵と相討

するか、自害するかを選ぶしかなかった。

それなりに頑張っていた大塔宮も敵が近くまで攻め寄せて来たので「今は是まで！」と覚悟を決め蔵王堂の中へ入って自害する準備をした。其処に、奮戦していた家臣の木首相模と村上彦四郎が来たが二人共に重傷を負っている。村上は大塔宮に衣服を変えよう要求した。「大塔宮」を名乗り敵前で自害する覚悟である。当然ながら反対されなければ、村上は声を荒げて涙ながらに宮を叱り、木戸の高檣から敵陣に向かって「我こそ大塔宮！」と大音声で名乗った。集まった敵が迷っている間に大塔宮らを逃がした村上は檣の上で切腹してから更に丁寧に自分の内臓を抉り出して床に投げ捨て太刀を銜えて壮烈な死を遂げた。

一方、城を脱した大塔宮らは、地元の勢力五百騎に行く手を阻まれたが、先に身代わりとなった村上の子・蔵人義隆が踏み止まって防ぎ、身に十数か所の傷を受けて切腹した。忠臣の犠牲で虎口を脱した大塔宮一行は高野山へ逃れた。

是を追う幕府軍の出羽入道は、切腹したのが大塔宮だと信じて首を京都に送ったところ全くの偽物と分かって大恥をかいだ。小城を落としても肝心の大塔宮に逃げられたのでは何にもならない。更に情報で「…敵は高野山へ逃げた！」と聞き、直ぐに高野山へ押し寄せて山中を隈なく探したけれども、高野山では僧兵が心を合わせて大塔宮一行を匿ったから幾ら調べても見つけられない。

○千劍破城軍(ちやのしろいくさ)の事

大塔宮一行に逃げられた幕府軍は、面子に掛けても攻撃を続けるしか無く、従来の軍勢・八十万騎に赤坂城や吉野攻めに回っていた軍勢を加えて

百万余騎を編成し是を千早城攻めに向けた。大塔宮の行方は不明だが、千早に居るかも知れないし何よりも目ざわりな城なので放置できない。

当然のことだが、千早城の周り七、八キロには幕府軍勢がギッシリと詰め掛けたから、そこそ満員御礼の国技館並みに立錐の余地も無かった。

一方、城に籠るのは千人足らずの楠木軍であるが「孤立無援」と言うか、何を頼り、誰を待つというあても無い状況下で必死の抵抗を続けている心の中は大胆不敵ながらも悲壮である。

此の城は東西の谷が深く切れて人の登る術は無く、南北は金剛山に続く峯が険しいけれども周囲が四キロ程の小城であるから、見る限りでは攻め落とすことも容易に見える。攻撃軍は最初から是を軽視して攻略の戦法も考えず、周到な攻撃準備もせずに、現場に到着した軍勢から勝手に押し寄せて来た。城の大手門辺りまで山道を登って来たのだが、城内からは矢一筋も射掛けることなく静まり返っている。寄せ手の軍勢は続々と集まって来るから、あまり広くも無い大手木戸口は程無く満員となったが敵は城壁の向こうにいるので攻撃も出来ず、只集まっているだけの状態になった。

其の時に城壁の向こうで敵の動きが有ったと思う間も無く空から無数の大石が降って来た。混雑で逃げ場がないので寄せ手の軍勢は大石に潰されるか暴れる騎馬に踏み潰されるかで助からない。

さらに城内からはサーブスで一斉に矢が射込まれてきたから五、六千人の犠牲者が出た。攻撃軍は一斉に退去して人員点呼をしたのだが、記録係の武士十二人が昼夜三日かけて記録しても間に合わないほど犠牲者が出たらしい。その為に「…今後は大将の指示なく合戦した者は罪に問われる！」

と全軍に布告したらしいが手遅れである。こうして千早城攻略は一時中断したが、幕府軍一方の大將である金沢右馬助は総司令官の大仏(おさらぎ)陸奥守に次の様に進言をした。

「先に赤坂城を攻略したけれども、それは兵士の手柄によるものでは無く、城中の構造を推測して水脈を止めたからです。此の城を見ると周囲は小山なので水脈が有るとは思われず、井戸も少ないのに水が豊富なのは東の山麓を流れる谷川から汲みあげているものと推測されます。そこで何名かに警戒させて水汲みを阻止するようにされては如何でしょうか…」

此の進言に他の高官も同調し、一族の大將・名越越前守を長とする三千余騎の武士団で「水道警備隊」を編成し周辺の水源と思われる場所に配置した。さらに城から通じる道には障害物を置いて城方の水汲みを完全に阻止する態勢を整えたのである。通常ならば是で城方は困るのだが、思慮深い知患者の楠木正成は最初からそう言う事態も有ることを想定していた。

此の城の付近に「五所の秘水」と呼ばれて山伏たちが利用する一夜に何百リットルもの水を湧かせていた場所が在るのを抑え、大木を切り倒して作った水槽を何個も置き、雨水を受ける水槽も作っておいたから数ヶ月間、一滴の雨が降らなくても困らなかつたのである。それを知らない攻撃軍は水源地と思われる辺りを厳重に警備していた。

最初の中は緊張して警戒に当たっていたが何日経つても城から水汲みに来ない。客の来ない商売ほどつまらないことは無いから警備兵も油断が出来る。それを見極めた楠木軍は弓の上手な者ばかり数百人を揃え闇に紛れて水源警備隊を襲った。

最初に数十人が討たれ、急報に接した幕府軍は水源地向かおうとしたけれども山在り谷在りで大軍は進めず、結局、守備隊長の名越越前守も本陣に逃げ帰るしかない。緊急事態なので旗や幟や天幕などを放置して来たから、楠木軍は其れを集めて城中に引き上げた。翌日には其の旗などを楠木軍が皆からぶら下げ「是は名越殿から頂いたものだが我らには無用なので、どうぞ、城内に入ってお持ち帰りください」と嘲(あざけ)った。

是を知った幕府軍の者たちは「これは名越殿の失策で有ろう」と陰で噂したから、それを聞いた名越の者は心中穏やかで居られない。指揮官が意固地になって「当軍の者は一人残らず此の城を枕に討死せよ」と無謀な命令を出した。気の毒な名越軍五千の兵は仕方無く、射られても討たれても怯(ひる)まずに攻撃を続け、城の周りに置かれた障害物を突破して城壁の下まで押し寄せた。

其処で一息、ついたところへ、城壁に横たえて在った太い材木が十本ばかりサービスとして落とされたから下に居た者は避けられない。その場で四、五百人の圧死者が出たのである。寄せ手の兵が混乱するところを、周囲の櫓(城壁)から一斉射撃が行われた。五千人程で押し寄せた軍勢も残り少なくなつて其の日の攻撃は止んだ。

其の攻撃に参加しなかった隊の者は、無責任に「気の毒なことだ」とか「恥の上塗りではないか」などと言った。確かに其の通りであるから其れ以後は積極的に攻めようとする者も現れなかった。戦場で戦わない武士は暇であり集まった軍勢は勝手に文化活動を始めて或いは連歌師を呼び、或いは双六や茶会・歌合わせなどを開き、其の戦場が平和な場所になつてしまつた。

「是ではいけない！」と気付いたのは護る楠木軍である。合戦は中断したが戦時態勢は続いているので「折角だから寄せ手の目を覚ましてあげよう」とゴミ・藁・木の葉などで人形を三十体ほど作り、敵から頂いた甲冑を着て夜中に城の麓に置き、其の前に畳を並べて楯にし、後方には選抜した五百の兵を配置して夜明けを待った。霧の深い明け方に鬨の声を上げたから、休んでいた攻撃軍は敵が城から出て攻めて来たものと思ひ我先に手柄を立てようと攻め掛けて来た。城の兵は矢戦さをするふりをして敵兵を城に近づけ、人形を残して城内に退いた。人形目当てに城近くまで敵が集まつたところで城内から一斉射撃が行われ、同時に大石が五十個ほどサービスで落とされたから多くの犠牲者が出る。

其の後は攻撃軍も余計な事をしなくなつたからまた暇になつたのである。そこで事も有るうに、遊郭から遊び女を呼び寄せるなど合戦場とは思えぬ羽目を外し、中には喧嘩口論で命を落とす馬鹿武者も出現した。此のことが聞こえたのか三月四日には関東から急使が来て「合戦もせず徒(いたずら)に日を送つてはならない」と厳命されてしまった。言われた大将たちは仕方なく城攻めの方法を検討したのだが有効な作戦も思いつかず結局は敵城を巡らす堀に橋を架けて攻め込もうとすると平凡な作戦を実行する事にした。

最初から、そうすれば鎌倉から怒られなくて済んだのだが「早速、材木などを集めると共に京都から五百余人の大工を連行して来て幅四メートル、長さ六十メートル程の巨大な梯子を造らせ是に数え切れないほどの縄を付けて滑車で巻き上げるように城壁に倒し掛けて仮橋とした。是を見学して

いた幕府の軍勢が、完成を待ち切れないように我先にと押し寄せて来たから、小城は攻略されるかに見えたのである。

すると何時の間か城方では多数の松明に火をつけて投げ下ろし、其処へ親切に油を撒いてくれたから、攻撃軍が苦勞して作った仮橋が一瞬にして猛火に包まれてしまった。押し寄せた軍勢は逃げ戻るにしても後続の部隊が詰めかけていて動けず、飛び降りるには谷が深すぎる。

其の中に仮橋が折れて谷底へ落ちたから、周辺に押し掛けていた者が無事で居られる筈は無い。其の有り様は仏話に言う「八大地獄」で罪人が剣の山に貫かれ、猛火・鉄湯に身を焦がされる様も斯くやと思ひ知らされる惨状であつた。

幕府軍による千早城攻撃の失敗は周辺に知れ渡り、吉野・十津川などに潜んで様子を見ていた地元の豪族や野武士たちに行動の示唆を与えたから大塔宮の命令に応じて集まる者が急に増え始め其の数は七千余に達した。取り敢えず彼らは所々の街道筋に潜伏して、千早城攻略に加つた幕府軍勢の陣を襲つたのである。幕府軍の多くは城攻めに失敗して引き揚げようとする途中であるから、百騎、二百騎の小さな集団になつている。何よりも地理不案内なので地元の野武士に襲われては助かり様が無い。辛うじて命だけは助かつて身包み剥がれて裸同然である。拾つた藁や草で腰回りを覆つた落人たちが戻る方角も分からず四方八方へ逃げて行つた。関東から遠征して来た軍勢は誇張かも知れないが八十万騎と言われている。それが十万余に減つて逃げ帰つた事になる。当然ながら名門の武士たちも此の戦いで先祖伝来の太刀や鎧兜などを失つたのである。

(続く)